愛着

橘　芙歩

朝だというのに、雑居ビルの階段は思いのほかうす暗かった。

三階、ここだ。階段をのぼりきり、僕は思う。

目指すパソコン教室のドアを見つけてホッとする。ジーンズのポケットにねじこんでいたスマホを取りだす。六時五十五分、窓がないうえに早朝で電気もついていない。

「バイトの人？」

暗がりから男の声がした。びっくりしてスマホを取り落としそうになる。人がいると思わなかった。見ると、四階へ続く階段に人がすわっていた。

「あ、うん、そう、です」

「まだきてないよ、会社の人」

雰囲気が若い、僕より歳下か。うす暗くて判然としないなか、バイト仲間になるらしい男をひそかに値踏みする。

階下からヒールの音が響く。

おはようございます、えーと、西口（にしぐち）　さんと百瀬（ももせ）　さんね、姿をあらわしたヒールの主は慌ただしくパソコン教室の鍵をあけた。

放たれたドアから急に朝日が射して、目がくらむ。ドアの向こうに全面ガラス張りの窓が見えた。入って、女の呼ぶ声がする。すわっていた男が大きく伸びをして立ちあがり、階段を駆けおりて部屋に入った。

僕は素早く彼の後ろ姿をチェックする。バケットハット、オーバーサイズのスウェットにダボパン。全身グレイコーデのストリート系ファッションが細身の体型にマッチしている。キャンパス地のトートバッグ、バケットハットから

のぞく襟足は金髪。

苦手なタイプかもしれない、僕は瞬時に思う。

オシャレすぎる男はどうも苦手だ。隣にいると、なんとなく気後れしてしまう。たかがポスティングとはいえ、毎朝、気の合わなさそうなタイプと顔を突きあわせるのは気が重かった。

女に手招きされて部屋に入る。パソコン教室のオーナーらしい女は、黒髪のショートカット、銀縁メガネ、紺のスーツ姿だ。こっちのほうがまだしも親しみがある。オシャレともいえない、ごく普通のかんじ。

今日の配布エリアはここでお願いします、オーナーが僕と男に地図を手渡す。赤マジックで配布エリアが囲まれている。地図を見ながら、僕はオーナーの説明を聞いていた。

重複を避けるため、二人一組でポスティングしてください。投函禁止のビルやマンションでのポスティングは絶対に避けてもらって、八〇〇部を目標に。もちろん時間になったら帰社していただいてけっこうです。私かスタッフに配布枚数を報告していただいて、サインもらってからあがってください。チラシはこれを、わからないことがあったら聞いてください、ではよろしくどうぞ。女は軽快なテンポで指示を出すと奥の部屋に引っこんだ。

男が僕を見た。

綺麗なアーモンドアイ。

視線が合ったと思ったらすぐそらされる。耳元のピアスが揺れて、きらりと光る。

「とりあえずいきます？」

男がボソリと言った。ああ、はい、口の中で答えて、用意されていたチラシの束を取り、斜めがけにしているショルダーバッグに入れる。ずしりと重い。

男が僕を見ている。彼が肩からかけているトートバッグもチラシの厚みでふ

くれていた。
彼は無言で踵を返す。気まずい。
外に出ると、かかっていた圧が一気にさがる。オフィス街だが、まだ人はまばらだ。これから勤め人が怒涛のように押しよせると思ったら、ぞっとした。春めいた空だけが、唯一の救いである気がした。
「こっちっすよね」
地図を見ていた男が、横断歩道の方角を指さして言った。地図が苦手な僕はいまいち確信が持てないまま、たぶんと答えた。
「あ、信号、変わっちゃう、早く」
彼が駆けだす。つられて僕も走る。紐が肩に食いこむ。渡りきった瞬間、点滅していた歩行者信号が赤に変わった。

お腹すきません？　バイト開始から二週間がたった頃、帰り道で彼が言った。
「すいてますけど」
それがなに、と言いそうになった言葉を飲みこんだ。
「ちょっと寄っていきません？」
彼はチェーンのコーヒー店を指さしていた。想定外の言葉におののく。僕の中にはバイトで知りあった人々と親交を結ぶという選択肢がない。言い淀んでいる僕にかまわず、なににしよっかな、彼はもう看板に目を向けている。
モーニングセットぎり間にあう、彼の言葉に背中を押されて店内に入る。ホットドッグとホットのセットを頼み、彼のあとを追う。他人と差し向かいでお茶するのなんて何年ぶりだろう。店内の喧騒が遠のき、足元がふわふわする。なんだか緊張してきた。とどこおりなく対応できるだろうか、人として。
椅子を引いたら床をこすってギギギとものすごい音がした。無様な気がして椅子を蹴り倒したくなる。

彼が僕を見ている。
金髪の前髪が目にかかっていて、見ているこっちの目がかゆくなる。すわってから、あ、と思う。コーヒーミルクがない。そうだった、こういう類の店はセルフだった。
「ミルク？」
返事をする前に、水のついでに俺取ってくる、彼はもう立ちあがっていた。ミルクひとつで動揺する自分が情けなかった。ほぼ家とバイト先を往復する毎日だから、こういう普通のことを忘れがちだ。コンビニのコーヒーもいつの間にか進化していて、マシンのどこを押したらいいのかわからないので買えずにいる。
はい、ミルクと水のカップを渡してくれた彼が前髪をかきあげる。右眉のあたりがきらりと光る。
「なにか」
僕の視線に気づいて彼が言う。
「いや、あの眉がきらりと」
「眉がきらり？　なにそれ」
すわりながら彼が笑う。笑うと幼いかんじだ。
「いや、だってほんとに」
もう一回髪をかきあげた彼は、ああ、眉ピと言った。
それで眉ピアスとわかった。眉尻の上と下に一個ずつ、パチンコ玉を小粒にしたみたいなピアスがついている。二つのパチンコ玉の間がつまり貫通していると思ったら、背中がひやっとした。
「あっ、眉にもしてたんだ」
「こっちは二日前からだけど」
「ああ、そうなのか、ふーん」

「給料入ったから思わず」
「週払い、ありがたいよね」
「そうっすね」
朝七時から三時間の時給制、しかも週払いなのはありがたい。僕はずっとポスティングとは、企業から委託された専門業者が一手に引き受けるものだと思っていた。だから働くとすると、ポスティング業者でのアルバイトかなと想像していた。ところが、いざ求人サイトを見てみると、不動産屋や学習塾、パソコン教室などが、ポスティングのバイトを直接募集していた。迷った末に、時給制で募集していたパソコン教室を選んだ。歩合制のほうがもうかるかもしれないが、ポスティング初心者の僕としては時給制のほうが安心だった。いざ始めてみると、効率よくポスティングするのはけっこう難しく、欲をかいて歩合制にしなくて本当によかったと思う。
「ピアスってどこであけるの？」
それほど興味はなかったが、僕はとりあえず聞いてみた。
「俺はピアススタジオで。今までは自分でやってたんだけど、眉ピって場所ミスったらダサくなるし、排除されてもあれだし」
「排除？」
「あー前にインダストリアル、排除されたことあって」
まるで暗号だ。
「えっとインダストリアルとは？」
「えっ、あ、やらない人わかんないか」
彼は自分の耳の上側をつまんで、ここらへんに棒みたいなの斜めに通すやつのこと言うんすよ、あ、違うか縦もインダスか、ブツブツ言い、最終的に画像見せたほうが早いとスマホを検索した。
こういうの、スマホがテーブルを滑ってくる。見るとピアスをした耳の画像

がずらりと並んでいる。その中に、耳の上から五分の一くらいの位置に、斜めに棒状のピアスが走っている画像があって、インダストリアルとテキストが記載されていた。どうやら二つのピアスホールを棒状のピアスでつなぐことらしい。ピアスの種類はいろいろあって、シンプルな棒だけでなく、弓矢、らせん、安全ピンなんかがあった。

正直、見ているだけで痛い。スマホを彼に返して、インダストリアルがなんだっけ、除外？　と質問する。

「排除、排除」

彼が笑う。

排除か、僕も笑う。ちょっと緊張がほぐれてきた。

「排除はあれっすよ、トゲ刺さったときに自然に抜けるじゃないですか、あれと同じで、体がピアスを異物と思って外に押しだそうとするときあって」

子供の頃、トゲが刺さって大騒ぎしたことがある。血管に入って心臓に刺さると大泣きしたのだったが、数日後にトゲは自然に抜けていた。

「ピアスでもそんなことあるの？」

「耳ちぎれるとか普通にありますよ」

「み、耳がちぎれる？」

あまりの衝撃に僕はのけぞった。

「俺の入れてたインダスも排除されちゃって。穴の位置がどんどん耳の端に寄ってきちゃうんすよ。つまり異物を押しだすわけ。軽めのに変えたりしておさまるときもあるけど、異物判定されちゃったらどうしようもなくて。それほっといたら耳ちぎれます、プチッて」

「な、なったのプチッて」

「いや、俺はヤバそうだったからインダス取ったんで、ギリセーフ」

僕は大きく息を吐いた。

「西口さん、ピアス無理めっすね」
また彼が笑う。
こうして見ると、彼はなかなか端正な顔立ちをしている。白い肌、くっきりとした目、すっと通った鼻、自然なかんじで口角があがっている唇、その下にある小さなホクロ、それらが絶妙なバランスで配置されている。
人の顔も書道も大元は同じ、バランスがすべてだと僕には思える。僕の顔だってパーツだけ見ればそう悪くはないのに、なぜか全体として見るとバランスが悪い。書道教室の先生に朱で直されるタイプの顔なのだ。
百歩譲って耳ピアスはわかる。だけど、わざわざ顔にピアスをあける意味がわからない。なにもしなくてもきれいなんだから、そのままにしておけばいいのに、感覚的にそう思う。
「西口さんてなにしてる人なんすか？」
彼は言ってホットドッグにかぶりつく。
「なにって」
もっとも嫌な質問のひとつだ。僕は頭の中で見栄えのいい答えを検索する。
「まあ、好きなことがあって、それをやるためにフリーターしてるかんじかな」
彼はモグモグしながら瞬きもせず僕を見ている。見透かされそうで視線をずらすと、耳のピアスが目に入った。いくつあるんだろう。左の耳たぶにチェーン、二連の輪っかのピアス、耳の上部の縁にそって小粒のジュエルが二つ。右の耳たぶに三連の輪っかのピアス、耳の上部の縁に王冠、耳の付け根にクロス。
「へー好きなことって」
モザイクかけてんだからそこ突っこむなよ、とは言えなかった。それで、まあ、その小説書いてんですけどね、ブツブツと応じる。
「えー小説ってあの小説？」
小説にあのもこのもあるか。なぜ知りあったばかりのやつにこんな話をして

しまったんだ、僕は即座に後悔する。
「まあ、好きで書いてるだけでなんともなってないんだけどね」
思わず自虐的な言葉を発してしまう。
「えーでもすごいじゃん」
このネタを言ったとき、大多数の人がする反応だ。なにがすごいんだと思う反面、少しだけ自尊心が満たされるのも否めない。
「まあ、すごくはないんだけどね、それで百瀬さんは？」
興味はなかったが礼儀として聞きかえす。
「え、俺？　べつになんも」
会話が続かない。
「なんでこのバイトしようと？」
僕はしかたなく無難な質問を投げかける。
「チラシ初なんすけど、金ほしかったし、髪とかピアスとかでけっこう制限あるし」
「ああ、なるほど」
「コミュ障入ってるし」
最近は猫も杓子もコミュ障だ。それは厳密な意味でのコミュニケーション障害とは異なる。まあ、そもそも自分がコミュニケーション障害じゃないかと疑ったときに検索して知ったのだが。他人とのかかわりを避けたり、苦手だと思うことの俗称でもあって、彼の言うコミュ障とはたぶんその程度で、それならば営業職で燃え尽き数年ニートしたあげく、三十歳を目前にしながら健康保険は扶養家族に入っている自分のほうが数段上だという気がしている。
アイスコーヒーをズズッとすする音がする。見ると、いつの間にか靴をぬいで椅子の上に三角ずわりしている彼がいた。僕は人前でこういうことができない。

「食べないんすか」
両手と膝でグラスを支えて、ひたすらアイスコーヒーをすすっていた彼が言った。視線が、まだ手をつけていない僕のホットドッグに注がれている。
「食べるよ」
食べようと思うけど、口の中で咀嚼された食物が歯にはさまったりして、相手に不快感を与えたらどうしようと妙な心配をしてしまう。だけど彼はこっちの思いに関係なく、今はもうスマホをいじっている。自意識過剰もたいがいにしないと。ポスティングで会うだけの相手なのに、いちいち気にすることなどないはずだ。
ホットドッグを頬張ると、ウィンナーの皮が弾けてプチッと音をたてた。一瞬、耳がちぎれるさまを連想しておえっとなったが、粒マスタードとケチャップの混ざりあったうま味に相殺される。
うわ、マジか、スマホ相手に彼が声をあげる。
「すんません、俺、先に出ますね」
あ、ああ、僕が応じる間に、素早くスニーカーをはいた彼は駆けだそうとして、こっちを向いた。
「おつかれっした、また明日」
ご丁寧に裏ピースをバッチリ決めてから、走りさった。
裏ピースを日常的に使ってるやつに初めて会った。そう思ったら少しおかしくなった。テーブルには彼が放置していった残骸がある。当然、片付けるのは僕だが、意外に嫌な気分にはならなかった。
二ヶ月がすぎた頃、ちょっとした異変があった。パソコン教室で会ったときは気づかなかったが、彼はあきらかに不調のようだった。チラシの入ったトートバッグを肩にしょいあげるだけで、眉間にしわが寄り、痛みをこらえるよう

な表情をする。ことなかれ主義の僕もさすがに大丈夫と声をかけた。大丈夫っす、そう言い続けていた彼だったが、すんません、今日ちょっとここまでにしてもらっていいですかね、とついに言った。

「いいよ、もちろん」

彼のぶんのチラシを引き受ければ問題ないだろうと思い、チラシもらうから百瀬さんは帰社して事務所でサインだけもらって帰りなよ、僕が言うと、ひじをがしっとつかまれた。

「いや、それだと給料減っちゃうんで」

「早退扱いになるからしかたないよね」

「それ困るんで、とりあえず今日はここまでってことで」

意味がわからない僕を諭すように、彼が無言で視線を送った先にゴミ箱があった。

「いや、ちょっと待って、それはさすがにマズいでしょ」

ようやく彼の意図を理解した僕は慌てて言った。

「わかんないって」

いや、でも、ためらう僕の目の前で、彼は残っていたチラシの束をゴミ箱に叩きこんだ。

彼が僕を見ている。

自慢じゃないがこれまでこういう不正をやったことはない。いけないことだと思う。かといって彼を糾弾する気にもならない。

彼が僕を見ている。

なんなんだよ、これ。なんで急にこんなことになるんだよ、僕はちょっとしたパニックに陥る。もしも彼の申し出を断った場合どうなる？　オーナーに報告して？　そんなやっかいごとはごめんだ。それに彼は立っているのもつらそうな様子なのだ。

「今日だけだから」
上目遣いで彼が言う。
残り三〇〇部といったところ、たしかにゴミ箱を一つひとつ覗くわけもないだろうし、今日だけならバレるはずない。
唾を飲みこむ。
一歩また一歩とゴミ箱に近づく。
歩道を歩く人々全員が僕に注目している気がする。
ゴミ箱にチラシを押しこむ。人目につかないようにグイグイ押す。大丈夫だよ、彼にそう言われるまで執拗にチラシを押しこんだ。
ゴミ箱から離れながら少しふらついた。やってしまった、湧きあがる罪悪感を抑えこむだけで精一杯だった。どっかで時間つぶさなきゃ、こともなげに彼は言って、前に入ったコーヒー店に僕を誘う。お互いに飲み物だけオーダーした。
黙りこくった僕を気にしている素振りの彼を無視して席につく。ついてきた彼は、椅子にすわるとき、いててとうめいた。
「なに、どうしたの、ケガしてんの？」
「ちょっとボコられて」
「誰に」
「彼氏に」
かっ、と言って僕は絶句する。
「なんちゅーわかりやすい反応」
彼が笑う。
「西口さん、今ヤベッとか思ったでしょ」
たしかに思った、なんだかいきなり自分が狙われているような気持ちになった。これまでゲイに会ったことはなかったが、ネットや小説なんかで知識とし

てはかなりあるほうだと思う。だけどわかった、僕の中ではほぼ架空だったことが。

「あのさ、冷静に考えてみてほしいんだけど、ここに女子がいるとします。でその女子がだよ、わたしの恋愛対象は男性ですって言ったとして、その子が自分のこと好きかもしんないって思う？」

「……思わないね」

「だよね、だから俺の恋愛対象が男性だからって、男なら誰でもいいわけじゃないんすよね。好みがあるし」

「だね」

「西口さんタイプじゃないから、安心してください」

「悪かったね、どうせ僕は女の子にもモテないよ」

彼は手を叩いて笑ってから、いててと言った。

「ボコられるってなんなの？　ケンカ？」

「ケンカっていうか、飲んだらたまにキレてきて」

「キレる？」

「うん、でサンドバッグ状態」

「サンドバッグ？」

「そう、バグッ、バグッてボコられる」

ボクシングのふりをしようとして、彼は痛みに顔をしかめる。少し体を動かすだけで痛いなんて、ちょっと普通じゃない。それなのに楽しいことでも話しているみたいな明るい口調の彼に、強い違和感をもった。

「もしかしてよくあるの、そういうこと」

「まあ、わりと」

「なんで別れないの」

「ボコったあとめっちゃ優しくなるし、泣いちゃうし、俺いないとダメなんだ

なって」

典型的な共依存だ。

小説の題材でＤＶのネタを検索したことがあって、まったく同じことが書いてあった。暴力を振るう男と自分がいないとこの人はダメになると思う女。読んだ記事は男女間のＤＶだったけれど、よく考えれば同性間だってありえる。意味不明な世界だし、なんでそういう心理になるのかまったくわからない。だけど歌うように話す彼を見たら、ちょっと怖くなった。

「病院いったの？」

「保険証ないから」

「ええっ」

「月々高いし」

「けどそんな痛そうなのに大丈夫なの」

「わかんないけど、骨は折れてなさげだし、まあ大丈夫っすよ」

あはは、笑いさえする彼が心配になった。

「ダメだよ、それＤＶだよ」

彼はなにも言わない。事の重大さをわかってない。そんな彼がじれったくなる。

「死んだらどうするんだよ」

だから、強い調子でついそう言った。

彼は胸をつかれたような表情を浮かべた。それからうつむき、少し微笑んだ。

それで、僕はそれ以上なにも言えなくなった。

帰り際、西口さん下の名前なに？　彼がふいに言った。

「尚志（ひさし）　だけど」

「じゃあさ、尚志さんて呼んでいいこれから」

「べつにいいけど」
戸惑いながらも答えると、彼はうれしそうに笑った。
「俺のこと冴来（さく）って呼んで」
手を振ろうとした彼は、いててと言ってまた笑った。

今朝も途中で配る気が失せて、けっこうな部数のチラシを捨てた。そういうわけで時間をつぶすために、いつものコーヒー店に僕らはいる。
冴来の体調が戻るまでだからと自分に言いきかせて、僕はチラシを捨て続けた。最初の頃は今日バレるか、明日バレるかとひやひやしてオーナーと目を合わせられなかった。だが一週間たち、二週間たってもオーナーの様子は変わらず、なんだ、意外に大丈夫かもと思うようになると、日常的にチラシを捨てるようになった。いつかはバレるに違いないと思いながらも、僕は冴来と話すこの時間をひそかに心待ちにしていた。
「尚志さん、水いる？」
名前で呼ばれる、ただそれだけのことで心臓がピクンとして、こそばゆいような変な気持ちになる。親以外の誰かに名前を呼ばれたのが久しぶりすぎて、居心地が悪い。数年のニート生活で友達との縁が切れたせいか、こんな些細なことに反応する自分が心から恥ずかしい。
うなずいた僕を見て、冴来が微笑む。いや、そうじゃないかもしれない。不機嫌そうにしているとわからないが、本来は普通にしていても微笑んでいるみたいに見える顔なのだ。顔面の筋肉を総動員して、ようやくひきつった笑みしか浮かべられない僕とは違う。
フットワーク軽くカウンターに移動する後ろ姿を見て、新たなＤＶは受けてなさそうだと内心ホッとする。本当は重めのプライベートの話なんて聞きたく

なかった。聞いてしまったら、なんとかしなくてはいけない気がして重荷になるから。

変な話だが、僕はプライベートの話を聞くのがものすごく苦手だ。とくにシリアスな話や相談をされると、おまえが解決しろと喉元に短剣をつきつけられている気がする。だから、なるべく関係性が深まらないように心を砕いて生きてきた。ようは相手に関心をもたなければいいのだ。そういう態度は相手にも伝わる。こいつに話そうという気がしない、僕は常にそんな印象を与える人間だったのかもしれない。いったんは生きるのが楽になった気もする。だけど誰ともつながれない空虚さに気づいたとき、なんのために生きているのかよくわからなくなった。

ただ聞いてほしいだけかもしれないよ、つい最近まで通っていたカウンセリングセンターのカウンセラーはそう言った。シリアスな話や相談をされるのが苦手だと感じるのは、解決しなければならないと西口さんが勝手に思いこむからじゃないのかな。相手はなんとかしてくれとまでは思っていないかもしれないよ、と。

僕は人との心理的な境界線が曖昧になりやすいタイプらしく、相手が解決すべき問題まで自分の問題として背負いこもうとしてしまうらしい。そう聞いても僕はピンとこなかった。人から重めのプライベートの話や相談をされるのが嫌で人間関係を希薄にしようとしているのに、相手の問題まで引き受けようとしているわけがないと思った。

それはね、西口さん、解決しなければという思いがほとんど強迫観念になっているからだよ。相談されるたびに短剣をつきつけられていると感じていたら、相談なんて誰だって聞きたくなくなるよ。問題を解決するのはあくまでも本人だという前提を認識したほうがいい。そうすれば相談を受けただけで、絶対に解決しなければならないとまでは思わないだろうし、人との関係性を希薄にし

ようとすることもなくなるんじゃないかな。まあ、まずは話を聞いてほしいだけかもしれないと思ってみるのはどう？　カウンセラーの柔和な笑顔が浮かぶ。お兄さんみたいな印象の彼は、西口さんは本当は他人と関わりたいと思っている人だと思うよ、とも言ってくれた。

「お腹やっぱすいた」

水のカップをとんとテーブルに置きながら冴来が言う。二人とも金欠なので、こう頻繁になるとコーヒーしか頼めない。

「水、何杯目？」

「五杯とか？　わかんない」

言いながら冴来が笑う。根が明るい質なのか、彼はちょっとしたことでよく笑った。そんな姿を見ていると、本当にＤＶを受けているのだろうかと思えてくる。もう少し怯えている様子や陰りがあれば別だが、ただ単にちょっと激しすぎるケンカをしただけではないか、そんな気がしてくる。

「お腹すいたー」

冴来はぼやっとした顔をしていた。

「そんなに？　朝ちゃんと食べてきた？」

「朝ムリ」

朝は食べられないということらしい。場合によって彼は極端に語彙が少なくなるのだが、だいぶん慣れてきた。僕は実家だから家に帰ればなにかしら食べるものがある。だけど冴来はどうだろう。ちゃんと聞いたわけじゃないけど、たぶん彼氏と同棲しているはずだ。

「冴来ん家、食べるものあるの？」

「うん、三日目のカレー」

「三日目？」

「大鍋で大量につくったやつ」

「へー自炊してるんだー」
「食べる？　肉入ってないけど」
え、僕は思わず言葉に詰まる。それって家にくるかってことだよな、彼氏がいたらどうする、そもそも家に遊びにいくほど親しくもないし、そんな考えが頭の中をぐるぐる回った。
「食べきれないんだよね、一人だと」
冴来が言う。
「一人？　彼氏は？」
「なんか急に地方で仕事とか言って今いない」
地方で仕事か、少なくともまともに働いているらしい、そんなことを考えている僕に向かって、決まりーと冴来が言った。

冴来は年季が入った妙に薄っぺらなマンションの二階に住んでいた。フローリングとの間に段差がない玄関スペースには、スニーカー、革靴、ブーツなどが雑然と置いてあった。
これがワンルームマンションかと思う。考えてみれば、僕はワンルームマンションに入ったことがない。実家暮らしだし、友達の家に遊びにいっていたのも高校生くらいまでだったから。
玄関からそれとなく部屋を眺める。玄関の左手の脇にこぢんまりとした流し台がある。玄関スペースと流し台が、段差もなく横並びになっているのが唐突だと思った。部屋の右手に視線を移すと、側面の壁が凸型に出っ張っていて、そこについている白いドアが目に入った。たぶんトイレと風呂だろう。出っ張っているせいで、ただでさえ縦に長い部屋がさらに狭まっている。部屋のどんつきに窓があり、レースのカーテンがかかっていた。
冴来はどうぞとも言わず、床に何本か転がっているガスボンベを次から次に

振っている。そのうちの一本を、流し台にちょこんと置いてあるカセットコンロにセットする。ツードアの冷蔵庫から金色の大鍋を取りだして、カセットコンロの上に置いて火をつけた。そこでようやく玄関でぼんやり立っている僕に気づいたらしく、なにしてんのと冴来が言った。

口の中でおじゃまします、と言ってあがる。冴来は牛乳をカレー鍋に投入していた。けっこうドボドボ入れているので、そんなに入れて大丈夫なのかと思う。おたまでカレーをかき混ぜている冴来を横目に、床に散らばっている服、雑誌、ビニール袋、ひしゃげたビールの空き缶などをよけて部屋の奥に進む。

出っ張りのないぶん奥は少し広く感じるが、敷かれたままの布団がスペースの半分ほどを占めていた。あとはハンガーかけ、ビーズクッション、床置きのテレビがあった。ここが自分の部屋だったら絶対にがまんできないけど、致命的に汚いわけでもない。手持ち無沙汰にカーテンの隙間から外をのぞいたら、錆びた窓の鉄柵が目に入った。

はい、これ、背後から声をかけられて振り向くと、ちょうど冴来がカレーを盛った皿を床に置いたところだった。げっ、なんで床置き。食べ物は地べたに置くなという母の教えが頭にこびりついている僕は、慌てて皿を持つ。あたりを見回したが、どこかに置こうにもこの部屋にはテーブルがないのだった。

「飲む？　ビールしかないけど」

冴来が言うので、少しためらったあと、うんと答える。真っ昼間からビールなんて飲んだことがない。というより家でビールを飲む習慣すらない。でも、まあ、いいか、今日は。香ばしいカレーのにおいを嗅ぎながらそう思った。

自分のぶんのカレーとビール二本を床に置いた冴来はあぐらをかき、立ったままの僕を見て、立ち食いすんの、と笑う。住人が気にしてないんだし、べつにいいかと思い、僕もあぐらをかいて皿を床に置いた。乾杯しよ、冴来が言う。おつかれーと乾杯して飲む。ビールの喉越しの良さを久々に感じた。

黄色みがかったカレーは予想通り辛くない。あれだけ牛乳を入れたらそれはそうだろう。だけど懐かしいかんじのする味で、煮崩れたジャガイモもおいしい。

「尚志さん、辛いのいける派？」

「そんなでもないけど普通かな」

「じゃ甘いでしょ、うちのカレー」

「おいしいよ」

「彼氏が辛いのぜんぜんダメで。最初にさ、辛口でつくったら辛くて食えねーってブチギレて卵三個入れてた」

冴来は彼氏のことを話すのがうれしいみたいだった。なんというか辛口がダメなところも可愛くてたまらないんです的なニュアンスを感じる。幼なじみに彼女ができたとき、延々とノロケ話を聞かされたことを思いだした。冴来の話ぶりはそのときの幼なじみの様子とそっくりだ。ノロケ話はいつだって退屈だし、ちょっとした腹立たしさを感じさせる。

もともと強くないうえに、空きっ腹で飲んだせいか、軽く酔いが回ってきた。酔うと、常に張りつめている神経がささみを割くみたいにときほぐされるのがわかる。血が全身を巡る。気持ちいい。気が大きくなって、慎重に避けてきたはずのプライベートの話を聞いてみたくなる。

「冴来の彼氏ってさ、なんの仕事してんの」

地方で仕事ってなんだと思ったし、片方がまともに働いているわりに冴来が金を持ってなさすぎるのも気になっていた。

「うーん、よくわかんないけど、先輩から声かかったら仕事するってかんじ？」

首をかしげながら冴来が言う。いかにも怪しい。僕の脳裏に半グレ集団のイメージがひとりでに湧いてきた。よくそんな得体の知れないやつと暮らせるなと言いそうになったが思いとどまり、生活費とかどうしてんのと質問を変えた。

「とりあえず彼氏が出してくれてんだけど、俺、服とかピアスとかで一気に使っちゃうから最近ちょっとしかくれない」

不満そうに口を尖らせている冴来だが、そこは彼氏に軍配があがりそうだ。最初は僕が質問して彼が答えていたけれど、互いに三本目のビールを飲みほす頃には、とりとめもない冴来の話を僕が聞くというスタイルができあがっていた。酔うにつれて、もともと抑えぎみで話す彼の声がほとんどささやきになる。ときおり掠れるのも耳に心地いい。

夜中にさ、どこもいくとこなくて公園のベンチにすわってたとき、彼氏に拾われたんだよね、寒かったし、消えてなくなりたい波がきてて、わかる？　消えてなくなりたくなるかんじ。わかんない人は永遠にわかんないんだけど、やっぱ尚志さん、わかってくれる気がしてた。でね、俺んちくるって彼氏が言ったんだよね……。

話を聞きながら、冷たい光を放つ街灯の下で、寒さに身を縮こめている冴来が見える気がした。僕がもしもその場に居あわせたなら、声をかけただろうか。完全に酔いの回った頭で思う。ささやくような冴来の声が耳をくすぐる。あのとき彼氏はこう言っただの、こんなふうに笑っただの、僕にとってはクズみたいな話なのになぜか妙に心惹かれる。

笑いを含んだ声、遠くを見る眼差し、紅潮した目元、自然に笑みがこぼれる唇。

冴来の顔は、そこだけ光があたっているみたいにとてもきれいだ。光の弾ける新緑にも似て、思わず目を奪われる。

彼氏のことが本当に好きなんだろうな。

そう認めたとたん、嫉妬が薄墨みたいに胸を濡らし、そんな自分に動揺する。どんな類の嫉妬なのかわからない。そんなふうに誰かを好きになりたいと思っている気もするし、ベンチで凍えている冴来に声をかけたのが僕だったならと

思っている気もして、激しく混乱する。
そんな僕に気づくわけもなく、冴来は彼氏の優しいところを数えあげはじめた。聞けば聞くほどバカじゃないのかとイライラがつのる。そんなのは少しも優しくなくて、普通なんだよと怒鳴りちらしたくなる。やっぱりDVなんて受けてないのかもしれない。受けていたら、こんなふうに話せるわけがない。DV被害にあっているかもと、少しでも心配した自分を笑いたくなった。エンドレスで続くゴミクズ同然のノロケ話と酔いのせいで、しだいにこめかみがきりきりしてきた。なんとか黙らせたい一心で、空き缶をぐしゃりと潰す。
「あ、ごめん、ないって気づかなかった。もう一本飲む？」
ようやく冴来が僕のほうを見た。
いらない、低い声で応じる。あ、うん、ごめんね、俺ばっか話して、そう言ったきり冴来も黙りこんだ。
「ね、やっぱ嘘なんでしょ、サンドバッグなんて」
僕の声は妙にひやりとしていた。
え、冴来が首をかしげる。
「だってさ、それだけ彼氏優しいとか自分で言っててさ、ありえないでしょ」
冴来はポカンとする。よくわからないことを聞いたときの子供みたいで、その表情が妙に幼く見えた。
「べつに俺、嘘ついてないよ」
「サンドバッグみたいに殴られるってほんと？」
こくりと冴来がうなずく。
「ケンカなんだよね」
しばらく考えて、ううん、冴来は首を横に振る。
「まさかSMとかじゃないよね」
なに言ってんの、冴来が笑う。

今度は僕が悩む番だった。僕の中では、サンドバッグと彼氏のノロケ話がどうやっても両立しない。暴力をふるってくる相手をなぜ優しいなどと思えるのだろう。

「ピンポイントでねらってくるんだよね」

ふいに冴来が言った。

「え」

「サンドバッグのとき。みぞおち、肝臓、膀胱ってクリーンヒットしてくるわけ」

「みぞおち、肝臓、膀胱？」

「急所なんだって。そこに入ったらヤバくて悶絶ってゆーか、息とまるしマジで動けなくなんの。もう内臓吐きだしそうなくらい」

冴来が屈託なく笑う。僕はうなずくことさえできない。

「あとね、喉仏も意外にヤバい。息とまるから。で、ここ」

冴来は耳の後ろを指でさわりながら言う。

この骨のとこやられると立ってらんなくなるって尚志さん知ってた？　でね、ほんとはさ、人中とかいきたいんだって、あ、人中って鼻と口の間のとこ、ヒットしたら流血するらしくって、だけど顔好きだからやんないんだって、ウケるでしょ……。

冴来は、延々とＤＶのことを話し続けている。

それなのに冴来の表情はあいかわらずきれいなままで、目は少し潤み、頬が上気していた。

彼氏との出会いについて話しているときとなにも変わらない。その事実に僕はぞわりとする。話している内容にまったくそぐわない様子の冴来を見ていたら、急激に酔いが覚めた。

家に帰ってからも僕は考え続けた。

冴来が話していた内容からすると、やはりＤＶ被害にあっていると思わざるえない。だけど本人にはあまり自覚がない。そんなことってありえるのかと思い、ネットで情報をあさった。

ＤＶを夫の愛情表現と考えるケースは珍しくない、そんなトピックが目にとまった。大手雑誌社が運営しているサイトのコラム記事だ。カウンセリングを通してＤＶの当事者だと自覚する女性は多いらしい。

冴来もこのケースにあてはまるのかもしれない。たしかに昨日の様子からしてもＤＶ被害者だという自覚はなさそうだ。このままでいいはずがない、そう思う一方で、知らなければよかったとも思ってしまう。そんな自分に嫌気がさす。どうしたらいいかわからないまま、ひたすらネットをあさり続けているうちに、小猿が映っているモノクロ動画にいきあたった。軽く説明を読むと、ハーリー・ハーロウという研究者の実験動画らしい。なんとなく気になって再生する。字幕を目で追いつつ、映像を見る。

小猿が放された実験室には、針金でつくった人形と布とスポンジでつくった人形が設置されていた。この二体は親から引き離された小猿に与えられた代理母親らしく、針金の母にだけミルクの入った哺乳瓶が据えつけられている。小猿がどちらの代理母親を選ぶかという実験らしい。哺乳瓶つきの針金の母を選ぶとしたハーロウの予想に反して、小猿は布の母を選んだ。小猿は生きるためのミルクよりも、柔らかな感触を必要としたということらしい。動物愛護の観点から、現在は再現できない実験ではあるものの、のちにスキンシップの重要性を示す研究につながったと説明されていた。

僕はしだいに実験結果よりも、必死になって布の母にしがみつく小猿の表情に目を奪われていった。途中、布の母をはぎとられそうになった小猿が、ギャッと一声鳴いてしがみつく映像が流れた。小猿の顔は愛するものを奪われまい

とする切実さに満ちていて、その痛みが僕にも伝わってきた。
見ているだけで苦しくなる映像なのに、なぜか目を離せない。次の実験では布の母だけが設置されていた。モンスターマザーと字幕が出る。もうやめようと思う。きっとろくな映像じゃない。それでも僕はブラウザを閉じることができない。振動する、バネ板で弾きかえす、圧縮空気が噴出するなど、布の母に施された仕掛けが紹介される。極めつけは、定期的に針が飛びだすというものだった。
背筋が寒くなった。今度の母はただの布の母ではない。文字通りモンスターマザーなのだ。
激しく振動する母に怯えながらも必死でしがみつこうとする小猿。バネ板で弾かれようと、圧縮空気が噴出しようと、やはり母にしがみつこうとする。
母にしがみついている小猿を鋭い針が突き刺す。ギャッと悲鳴をあげて飛びのいた小猿はしばらくすると母にしがみつく。また刺される、悲鳴、しがみつく。刺される、悲鳴、しがみつく……小猿は何度刺されても母にしがみつこうとする。もうやめてくれよ、動画を見ながら僕は泣いていた。泣きながら、冴来のことが少しわかったような気がした。

あんな動画を見たせいで一睡もできなかった僕は、ある決心を固めていた。冴来にＤＶ被害の当事者であることを自覚させようと思ったのだ。バイトが終わったら家にいっていいかと聞くと、冴来は二つ返事でオーケーしてくれた。
マンションに向かう道すがら、金貸してくんない、冴来は言いにくそうに目を伏せた。理由を聞くと、ビール補充しとかないとキレそうだからと言う。コンビニでこれまで手をつけていなかった預金を切りくずして金をおろした。親がずっと貯めてくれていた金だ。
お昼ごはん用になんか買っていいよ、僕が言うと冴来は目をきらきらさせた。

ダッシュでカゴを取ってきて、カップ麺とおにぎりを二個入れてから、ポテチを手にして僕を見る。うなずくと、やったーと冴来が言う。たかがポテチで。僕自身、金がないからあんまりおかしいと思わなかったけど、冴来は異常なほど金を持ってない。バイト代をすぐ使ってしまうこともあるだろうが、昨日調べた中に経済的ＤＶというのもあった。必要な金を渡さないケースもあるらしく、その可能性も無視できない。

マンションで昼ごはんを食べながらも、僕はどうやって話を切りだそうかと考えていた。ＤＶ被害のコールセンターの番号も調べてあるが、ともかく本人が相談する気にならなければどうしようもない。

あのさ、ちょっと話あるんだけどいい、僕が言うと、とっくに食べおわってテレビを見ていた冴来がこっちを向いた。

「サンドバッグのことなんだけど」

僕はそんなふうに話を切りだした。

「僕からすると、やっぱりＤＶだと思うんだよね、冴来はさ、そのあたりどう思ってるの？」

冴来はただ僕を見ている。

「普通はさ、好きな人を殴ったりしないと思わない？」

冴来は無言のままだ。僕はしだいに落ちつかない気持ちになる。

「もしかして暴力を愛情表現と思ったりしてない？」

「……暴力が愛」

初めて冴来が反応した。

「そう、そうなんだよ、ＤＶ受けてる人って、暴力を愛されてる証拠だって思う人がけっこう多いんだって」

勢いこんで話す僕を、冴来がじっと見つめている。

「暴力が愛とかよくわかんないけど……そういうんじゃないんだよね、たぶん」

つぶやいて冴来が微笑んだ。かすみ草みたいに無垢でひっそりとした笑みだと思った。

尚志さんが心配してくれてるってわかってるし、だけどほんとにそういうんじゃないんだよ、うちは。俺がバカなんだよね、彼氏をイラッとさせちゃうっていうか。いつも直前までわかんなくて。急に空気が凍るかんじわかる？　ほんとビシッて空気凍るんだよね。あ、くるなって、体に力入れなきゃって。だけどブルブル震えちゃってぜんぜん力入んなくて。寒いとこいったら勝手になるじゃん、ほんとあんなかんじで……。

冴来が思いだし笑いをする人のようにクッと笑う。

殴られてると、音が消えて景色も消えて。気づくとさ、目の前で彼氏が号泣してるわけ。俺が悪かった、もう二度としないって……。

冴来の話を聞きながら嫌悪感を覚えた。昨日読みあさったＤＶ情報が脳裏をよぎる。ＤＶにはサイクルがあります、加害者がささいなことでイライラする緊張期、怒りをコントロールできなくなり激しく暴力をふるう爆発期、謝罪を繰りかえして人が変わったように優しくなるハネムーン期……。ハネムーン期って。ネーミングのあまりのシュールさに、僕は言葉をなくした。

目の前の冴来はどこか遠い眼差しで、木漏れ日の中にいるときのような柔らかな表情のまま、ささやき続けている。

ほんと子供みたいに泣いてんの見てたら、この人かわいそうだなって俺も泣けてくんの。そしたらね、ぎゅうっと抱きしめてくるんだよね。俺、そのときにね、尚志さん、生きててよかったって思うんだ……。

そんなバカな話があるか、僕の中で嫉妬とも怒りともつかない感情が湧きおこる。そんな目にあわされているくせに、抱きしめられただけで相手を受けいれてしまう冴来が許せなかった。そんなのはただの錯覚だと、どうあってもわからせたいと思った。

小猿の動画を見せたらどうだろう。
僕でさえもあれほど感情を揺さぶられたのだ、冴来もあるいは。
すぐさまついていたテレビを消した僕は、これ見てほしいんだけどとスマホを差しだした。スマホに表示された小猿を見て、なになに、おもしろ動画？と冴来が言う。いいから見て、半ば強引にスマホを手渡した。
針金の母と布の母を見て、変な人形と笑っていた冴来だったが、これなんかの実験ってことだよね、と言ったきり動画に見入っている。布の母をはぎとられそうになった小猿がギャッと鳴いたところで、この子、ほんとに布の人形のことお母さんって思ってる、冴来がつぶやいた。
モンスターマザーが登場した時点で、僕は冴来の顔を観察することに注意を向けた。小猿が苦しむ姿を見たくなかったこともあるが、なにより冴来がどう反応するか知りたかった。
ちょうど動画はモンスターマザーの仕掛けを紹介する場面に入った。冴来は食い入るように動画を見ている。眉間にしわが刻まれ、顔色も少し蒼ざめて見えた。
さまざまな仕掛けにさらされる小猿を見ながら、冴来は親指の爪を噛みはじめた。小猿が針で突き刺されて悲鳴をあげる場面にさしかかったとき、冴来は自分が刺されたみたいにびくりとする。小猿が悲鳴をあげるたびにびくりとしていた冴来は、いつしかガタガタと全身を震わせていた。刺されても刺されても母にしがみつく小猿の様子に、なんでこんなことすんの、ねえ、尚志さん、この子、なんでしがみつくの、なんで、なんで、なんで、そう叫びながらぼろぼろ涙を流した。
ついにスマホを壁に投げつけた冴来は、床に突っ伏して大声を放って泣いた。それがあまりに激しいので、僕は動画を見せたことを激しく後悔する。
なんでこんなの見せんだよ、冴来が泣きはらした目で僕を見た。

「ごめん、でもわかってほしくって」
「なにを」
「冴来はさ、あの小猿と一緒だよ。殴られても殴られても相手を許すなんておかしい。そんなのほんとの愛じゃないと思わない？」
僕はなおも言いつのろうとしてハッとする。
冴来の蒼ざめた顔から完全に表情が抜けおちていた。
俺、あの子と同じ？　しばらくして冴来がぽつりと言った。それってどういうこと？　問いかけられたと思って答えようとした僕だったが、冴来の様子を見て言葉を飲みこんだ。彼が自分自身に問いかけていると思ったから。
だってさ、あの子、刺されて痛いのにお母さんと思ってしがみついて、なんで、尚志さん、なんでだろ、痛いのに、痛いけど、でもぎゅうってしてくれて、だから俺、俺は……。
冴来は焦点の合わない目をして、ぶつぶつ言っていたかと思うと、次の瞬間なにかに驚いたみたいに目を見開いた。それからゆっくりと首をめぐらして、僕を見た。
「ほんとの愛じゃない？」
震える声で冴来が言う。
「あの子がしがみつくのも、俺がぎゅっとされて生きててよかったって思うのも？」
そう問われたが、僕は答えることができない。
「ほんとの愛じゃないって尚志さんは言ってるわけ？」
蒼ざめていながら、どこまでも張りつめている冴来の顔は冴え冴えとして美しかった。
針に何度も刺されながらモンスターマザーにしがみつく小猿も、暴力をふるう彼氏に抱きしめられて生きていてよかったと思う冴来もいびつだ。そう思う

のに、僕はなぜか答えるのをためらってしまう。
「ねえ、答えてよ、尚志さん」
挑むような口調とはうらはらに、冴来の瞳は今にも壊れてしまいそうだ。
「そうだよ、そんなのほんとの愛じゃない」
問いつめられた僕は、ついにそう言った。
次の瞬間、冴来の顔面の筋肉がびくりとひきつった。そのまま痙攣が続く。
ヒィッと呼吸音が聞こえたかと思うと、冴来が自分の喉をかきむしった。
過呼吸だ。退職前の一時期、僕もよく過呼吸に陥った。
冴来、ゆっくり息を吐いて、彼のかたわらにつき、正常な呼吸を促す。しばらく繰りかえすうちに症状はおさまった。ホッとしたのも束の間、彼の肩が小刻みに揺れていることに気づく。声を殺して、冴来は泣いていた。
「……尚志さんはひどい」
嗚咽をこらえながら、冴来が言った。
「冴来」
ぼたぼたと涙を流しながら、冴来が僕を見る。
「体が痛いのはがまんできるけど、心が痛いのはがまんできない」
痛ましいくらいに、彼の声は震えていた。
「尚志さんはひどい、ひどいよ」
そう言うと冴来は、子供みたいにしゃくりあげた。

スマホの通知音で目が覚める。僕も冴来もいつの間にか眠ってしまっていたようだった。窓の外は薄暗い。スマホを確かめていた冴来が、彼氏帰ってくるみたい、と言った。あ、じゃあ、帰るよ、そう言って僕は立ちあがる。ぼんやりと僕を見ていた冴来は、駅まで送るよと言った。
肩を並べて歩いていたら、冴来が僕のほうを見て、目、はれてる？　と聞く

ので、うん、少しと答える。あーもう久々に大泣きしたー、冴来がサバサバした調子で言う。

僕はひどい無力感にとらわれていた。よかれと思ってしたことなのに、結局冴来を傷つけてしまったのだ。たぶん彼氏よりもひどく。

いつしか僕も冴来も黙りこみ、無言のまま駅についた。

じゃあ、僕が言い、うんと冴来が応じる。

彼はうつむいて、少し微笑んだ。

そんなふうに微笑むとき、冴来は少しさびしそうで、僕はそんな彼の表情を見るたびに切なくなる。

あのさ、冴来が顔をあげる。うん、僕が言う。

「あの小猿がしがみつくのって愛だと思うんだよね。あの子も俺も愛する相手を間違えてるかもしれなくても、だけどやっぱり愛だと思うんだよね」

冴来は真剣な眼差しで、まっすぐに僕を見ていた。

やがて彼はふっと微笑み、また明日と手を振ると、踵を返してもときた道をもどっていった。

僕はただ、人波に見え隠れしながら遠ざかっていく彼の背中を見ていた。

（四〇〇字詰原稿用紙換算五十六枚）（了）